

## 再び所謂東岸気候に就いて

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2011-08-29<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 佐々倉, 航三<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00005983">https://doi.org/10.14945/00005983</a>                   |

## 再び所謂東岸気候に就いて

佐々倉航三\*

筆者は昭和27年度(1952)の静岡大学文理学部研究報告において所謂東岸気候について管見を述べた。従来気候学書に記されている東岸気候というのは海陸の分布を模型的に取扱ったときに大陸の東岸における気温の年較差が大陸の西岸におけるものよりもずつと大きくなり、気候の年変化の様相は大陸の東側において顕著だということであり、それに相違ないのであるが、筆者はその他に1)梅雨現象が東岸気候の特徴の1つであり、2)有名な熱帯性低気圧の発生することもまた東岸気候の特徴の1つではないかということを経験的な理由を附して提唱したのであつた。わが国附近における梅雨現象と台風の発生とは周知の事実であるが、他の諸大陸の東側では梅雨に類似した現象があるかどうかということについては筆者は今日まで確かめることが出来ずにいたのである。私の手許には諸外国の気候誌に関する文献は若干あるが気象報告類特に天気図などがないので致し方なかつた。ところが最近ふとした機会から長友須田建氏(気象庁、予報部の予報官)が数年前米国へ留学された際米国の東岸地方にも、日本におけるほどに顕著ではないが矢張り梅雨に似た現象が初夏に起ることに留意されて、それに関する研究をワシントン大学の卒業論文に書かれたということを知つたのであつた。それで少くとも北米大陸についてはその東岸地方に梅雨現象が起ることを承知し得たのであるが、他の亜仏利加や南米や濠洲などの諸大陸ではどうであろうか。勿論程度の差はあろうが梅雨前線に類似のものが発生するものかどうか。誰人でも結構であるからこのことを調査研究して下されば幸甚である。私には前述の理由でこの点を調査する便宜を与えられていないのである。世界的規模において梅雨現象の存在が確認されれば興味あることと思う。

次に近年頻りに話題となる jet stream についてであるが、jet stream は大陸の東岸(勿論高空)においてその速度が最も大きく西岸において最も小さいことが知られている。温度の水平傾度の最大のところに jet stream が存在することから考えれば大陸の東岸においてその最大風速が現われることは首肯し得るところである。これなども東岸気候(気象)の1特徴として挙げ得られるのであるまいかと思う。わが国附近における二重 jet stream について、南方 jet の消滅と梅雨の明けとに関連があるといわれていることなども

\* 静岡大学教育学部教授

結局同一現象における二相に過ぎないものと私は諒解している。識者の御示教を仰ぎたい。

(1956年8月15日静岡大学地学教室にて)

#### 参 考 文 献

1. 福井英一郎：気候学 p. 130, 1938 東京
2. K. Sasakura: On the So-called East Coast Climate,  
Reports of the Liberal arts Faculty, Shizuoka  
University (Natural Science) No 3 (1952)

## 大地形・地質構造の根本問題をめぐりて

望 月 勝 海\*

地震や火山の新聞記事がめずらしくないわれわれは、地球が不安定なことをつねに身ぢかに感じねばならぬわけだが、やはりとかく忘れがちである。すこし地質学をまなびアルプスのもめくちやの構造などを知れば、地球の表層が水アメのように流れたり流氷のように押しつぶせたりするのがわかるわけだが、人間的尺度をはずれるとピンと来ないらしい。Our Mobile Earth というのはデーリーの有名な本だが、まずこのひとことをツツカリ頭へ入れて置きたい。〔邦訳：本間不二男，構造，地質学講談〕

地球は天体として日夜はげしく運動し、その表面はたよりない地殻でつつまれている。地球はめまぐるしく1日に1自転し、1年という短期間に大きく太陽のまわりを回転する。その太陽が毎秒19.5 kmの速さでヘルクレス座の方向へ移動し、更にわが銀河系は2億年の周期で回転し、その速さは太陽付近で毎秒260 kmである。これらの数値は日常生活とケタ遠いだが、地質学上のそれにくらべたらどうだろうか。地球の年齢40億年、地質時代25億年、古生代から5億年上記の2億年は中生代以降の年数だし、地軸の歳差運動の周期2万6千年などは問題とならぬ。ヒマラヤ地中海造山帯の前身テチス海が古生代末から今におよぶことを思いだす必要がある。夢のような数字を天文学的と形容し、地質学的数字はそれに次ぐとされているが、地質学的現象は天文学的のそれと絶対的にかき離れたものではない。地球の現象を理解するには人間的尺度は捨てねばならない。必要なのは地質学的尺度であり、人間的尺度よりはむしろ天文学的な視野である。

科学が進むほど、地上の現象が太陽はじめ宇宙全体とつながることがわかつて来る。現在まだ不可解とされていることも、将来、くつかは宇宙的原因により解釈されるのではあるまいか。一例

\* 静岡大学文理学部教授